

【小説部門・奨励賞】

フレンドーナッツ

滋賀県立草津東高等学校 第2学年 瀧村 千鶴

たっぷりの砂糖がまぶされたシュガードーナッツを Tongue で挟み、明らかに慣れている滑らかな動作でレジへと歩みを進める少年がいる。彼の名前は埋木皐月。家が近所で、このドーナツ屋の常連である。外は雨。梅雨のせいで生乾き気味のシャツのかすかな匂いなんて消されてしまうほどに、この店のドーナツは魅力的な匂いを漂わせている。

「お会計は、一点で 110 円です！」

ここの看板娘、揚堂奈津は今日も元気だ。目はぱっちりとしていて、笑顔が眩しい。

「あれ、この間まで私が店番してたら『うちの校則ではバイト禁止だよォ〜』って毎回言ってたのに今日は言わないんですね」

「おととい、店長さんから揚堂さんがここの娘さんで、ただの無給のお手伝いだというのを聞きちゃった。今ままでごめん」

埋木は自分が勘違いで人に偉そうな物言いをしたことを内心恥じていたが、それを表に出さないように淡々と振る舞う。

「そんな、謝罪なんて。わかってくれたなら大丈夫だよ。じゃ、これ」

埋木は奈津から渡されたドーナツを受け取る。

「許してくれてありがとう。また、来ます」

「了解しました！最近うちもお客様の入りが悪くてさ。常連さんの存在ありがたいよ」
雨のせいもあるだろうが、小さな店には埋木しか客はいなかった。

「あ、そう」

「もうちょっと、繁盛してくれると私も嬉しいんだけどね。おいしさを宣伝し足りないのかな？」

原因は近所にできたパン屋のせいだと考えられる。そこではパン屋の強みを活かしたドーナツがなんとやらで繁盛しているらしい。埋木は行ったことがなかった。埋木はこのドーナツが好きだ。いつもいい匂いが染み出しているし、外はさくさく、中はふわふわ、それでいていくら食べても胃もたれしない。そんな素晴らしいものを作るお店が今困っていると、なったらぜひとも協力したい！と返事をしたい所だ。

「なら、俺でよければ協力させてよ。このお店の役に立ちたいんだ。ドーナツうまいし」
奈津の表情がぱっと明るくなった。

「うわぁ、ぜひ！」

嬉しいなあと言った様子の奈津を見て、埋木はちょっと後悔していた。考えなしな彼は、このドーナツは大好きだが奈津のことが好きなわけではなかったからである。それは奈津の異常性に由来している。

奈津の内なる執着はとても強いものであった。ドーナツ屋の娘であるからか、「穴」に異様な興味を持っていた。特に、「何かしらの中心に穴を開けること」が、彼女の譲れないこだわりだ。物理的な問題だけではない。奈津はいつも、教室に貼られているカレンダーの中心に位置する日に学校を休む。そして、通知表の真ん中にくる教科は決まって「1」、それ以外は「5」。他を挙げるとキリがない。中心が存在するのだったらとにかく穴を開ける。埋木はその奈津の努力の方向性がおかしいと思っており、真面目だからそれが気に食わない。奈津のことが苦手になるのは必然であると自分に言い聞かせている。

その週の土曜日、二人は駅前にあるカラオケ店で作戦会議をしていた。さすがに、お互いの家に行くのは気がひけた。

「宣伝としてわかりやすいのは、新メニュー開発だよな！埋木さんは何かアイデアあるかな！？」

まだ六月というのに店内は冷房が効いていた。寒い、それ以上に奈津と一対一で会話しなきゃいけないという状況が埋木を緊張させる。

「じゃあ、この食材を使ったドーナツなんてどう」

埋木はあらかじめ用意しておいたタブレット端末の画面を奈津に見せると、奈津は画面に食いつく。ぐいっと埋木と幅を詰めてきた。

「ふんふん、なるほど、これだったら駅前の輸入洋品店で買えたはず」

二人の会議は白熱した。お互いが考えた仮の新商品のアイデアを出し合い、ダメ出しをくらいあい、レシピを追及しあった。奈津の熱気は凄まじく、自分の家族のお店を本当に大事にしているのが伝わってきた。埋木は奈津に対して抱いていた苦手意識を忘れる所だった。

「あと、言うの忘れてたけどこう言うのも考えてたんだ」

埋木の口の端が持ち上がっていて、明らかに自身満々と言うように端末の画面を奈津に見せた。これは、埋木が出すタイミングを見計らっているほど彼自身が気に入っているデザインだった。しかし、奈津はそれを見た途端に今まで笑顔だった顔が急に存在感をなくす。

「それだけは絶対に嫌だ。」

「どうして」

普段の声とは似ても似つかない声を彼女は出した。抑揚がなく、低い声。

「うちでは、とても売れない。少なくとも私の目の届く範囲では」

そのドーナツの中心には穴がなかった。穴のないドーナツは、その中心にリボンを模した砂糖菓子をのっけようというデザインだ。

「考えてくれてありがとう。真ん中の飾りをなくして穴を開ければ、完璧だね」

埋木はこのデザインに自信があった。奈津は普段から可愛くデコレーションされた筆箱や文房具を使い、これなら彼女の期待に沿うことができると思ったのだ。

ドア近くの受話器が鳴った。どうやら部屋の利用期限がもうすぐらしい。二人は急いで手続きをした。

「今日はこれで帰ろう～。そうだ、レシピの試食会を開かなきゃ！いつ空いてる？あ、それと、考えてくれたレシピ、写真に撮らせてください！」

奈津は埋木のタブレットの画面を撮ったが、埋木は穴のないドーナツの図案を彼女に見せることはしなかった。

カラオケ店の外にでて、いつもの調子に戻った奈津が埋木に問いかける。

「基本的に土日はいつでも空いてるよ」

今日は土曜日だった。

「じゃあ、明日で！都合は良いかな？」

「う、うん」

「りょうか～い！またね！」

「ばいばい……」

埋木は帰路についた。雨が降っている。家までは徒歩なので、考え事をする時間がたっぷりあった。奈津の性格の地雷を知っていたにも関わらず、自分はそれを踏んでしまった、と、苦い気持ちになる。また会って、愛するお店に関わらせてくれることに感謝しないとイケない。明日の試作会では絶対にヘマはしないぞと決意した。彼の心は純粹に、奈津に対して自分がしたことを申し訳なく思う気持ちしかなかった。彼はまっすぐで単純だった。

晴れた。埋木は若干足がひきづられる気がしている。天気は晴れているのに、心はどんよりとしている。しばらくトボトボ歩いていると、閑静な住宅街で一際目立つ赤い屋根、白い壁、可愛らしい看板。そのお店に出入りする通常のお客さんに紛れて奈津は立っている。

「奈津さん！おはようございます」

「埋木くん、おはよ～。今日も頑張ろうね！」

奈津は昨日のことはまるで気にしていないように感じられた。いつも通り屈託の無い笑顔を見せている。昨日とは打って変わって天気が晴れだったので、奈津の笑顔は埋木に眩しくて、沁みるような痛さすらあった。昨日の傷が癒えていないのかもしれない。

「今日は試食会って聞いているんだけど、厨房を貸してくれるの？」

「ああいや、営業日だからちょっとそれは難しくて。うちのキッチンでやることになるんだけど」

「わかった。ありがとう」

奈津の連れられて勝手口から揚堂家に入る。一階は丸ごとお店になっているので、階段を上がった先が玄関だ。

「ただいま～」

「お邪魔します」

家の中には誰もいないようだ。奈津は一人っ子と聞いているし、両親は店の方へ行っているのが当たり前である。奈津に連れられてキッチンへ入る。なんとなく、埋木の家のキッチンより大きくて清潔な感じがする。

「材料とかはバッチリだよ。じゃあ、作り始めようか！」

結果から言うと、奈津は料理が下手だった。

塩と砂糖を間違える、というテンプレート的なミスはしなかったものの、生焼けのまま揚げ油からドーナツを取り出したり、ホイップを泡立てるのに手間取ってこぼしてしまったり、とにかくドジが目立った。埋木は家事の手伝いをするのが好きだったのでなんとか形になった試作品は数個あるが。

「ごめん〜、時間が結構無駄に…材料も…」

失敗した都度謝っていたが、やはり結構気にしているようだ。

「いやいや、大丈夫。奈津さん生地こねるのうまかったし」

「ありがとう…じゃあ、この子達、今日の晩にお母さんとお父さんに見せてきますね。」

「わかった。任せます」

「任せました〜」

「じゃあ、今日はこれで」

時間がかかってしまったので外はもう真っ赤に夕日で染まっていた。

家に帰ってスマホを見ると、奈津から連絡があった。

『ほんっとーに申し訳ないんだけど、一つ一つの単価が高くて量産してお店に並べるのは難しいみたい汗ごめん』

「…まじか…」

まあ、なんとなく想定はしていたが。

『で、新しく、宣伝用のウェブサイトを作ってみるのはどうかなって提案されて。家のパソコンでできるらしいし』

正直、もうなんか面倒くさくなっていた。奈津の地雷に気をつけて話すのも、新しいアイデアをたくさん考えるのも。好きなお店が繁盛するのは確かに嬉しいことだが、自分がここまで頑張る理由がそれしかないのは弱い。もう、この件からは降りさせてもら

『また来週の土曜にそっちに伺わせてもらうね』

責任感と彼女の笑顔が邪魔をする。どんなに洗っても落ちることのない染みのせいであると心の中で決めつけた。

『(ありがとう)』

流行りのキャラクターの可愛いスタンプで返答がある。申し訳なさとの謎の高揚感でテンションが上がってスマホを投げたくなった。

彼女が自分に対して抱いている感情は一体なんなのだろうか。ただの協力者、それとも友達？いきなり家業に関わろうとする気のふれた邪魔者と思われていても不思議でない。もし、そうだとしたら明日から学校に行けなくなってしまう！恥ずかしい！

スマホの画面がふっと明るくなった。授業中に着信音がなってはいけないので、サウンドはオフにしている。

『このプロジェクト？が一段落したら、うちのシュガードーナツ一年間無料券をあげるよ』その一文を見て、どうしようもなくたまらなく幸せかつ、自分はこの世界で今一番苦しんでいると確信した。

揚堂奈津のことがこんなにも気にかかるのはどうしてだろう。彼女には憎しみとはいかないまでの不快感を抱えているのは間違いなく事実である。それは、いついかなる時でも自分が死ぬ気で努力してやっと掴んだものを平気で踏み躪るような行為をするからか、見た目がえげつなく好みだからとか、彼女が本気で嫌がることをしてしまったから、考えれば考えるほど苦しくなっている。でも、そうやって苦しんでいると彼女に対して働いた無礼を自分で戒めているような歪な安心感があつた。とにかく、来週の土曜が楽しみであつた。

学校で同じクラスである彼女を見つけても埋木は何もしない。ただ、向こうから挨拶はしてくれたのでそれに応える。男女間の挨拶ごときで騒ぐような精神年齢を持っている人は意外というもので、埋木が普段仲良くしている友人もそのうちの一人だつた。

土曜日は本当に何事もなかつた。埋木が奈津の地雷に用心深くしていたのもあるがとてもおだやかに、Webサイトのデザインについて話あつていた。

夏休みになると奈津は長期間の家族旅行に出かけた。一週間、七月の末。お盆の混む時期に行くよりはまだマシだと彼女は言っていた。埋木は特にやることがないのでHTML言語の勉強をしていた。彼女からの連絡がないことは確定しているので、穏やかな気持ちで毎日をごすことができた。

「お久しぶり。これ、お土産で一す」

久しぶりに会った彼女は少し日焼けをして、エネルギーに満ち溢れているように感じた。

「ありがと、俺旅行とかどこも行く予定なくて、俺からのお土産はあまり期待しないでいただけると」

「いいよいいよ、見返りとかいいって。これは日頃のお礼です」

それは見返りではないのか？と思った。

「それより、奈津さんに会えない間、俺も色々勉強しててさ」

そこからの話し合いは順調に進んでいった。奈津と話している間は細かいことが全部どうでもよくなるほど楽しかつた。

二人の合作は夏休みがあと二週間ほど残っているところで完成した。

「いや～！ありがとありがと。この可愛いサイトのおかげで、お客さんも増えたような気がするし。埋木くんには助けてもらってばかりだつた。これ、約束のシュガードーナツ一年間無料券です」

サイトだけでなく、駅に打ち出す広告なども作り、地図も記載していたため客足は確かに増

えていた。

奈津から手作りと思わしき紙切れを渡されそうになった。これを受け取ればこの関係が完璧に終わると考えると、かなりためらいがある。

「? どうしたの、貰わないの？」

「あ、いや、なんか寂しいなと思って」

「なんで？」

「せっかく奈津さんと仲良くなれたのに、これ終わったら二人で会う機会とか減るし」

もうないだろ、会う機会なんてと思っていたがそんなに卑屈なところを見せるのは本意ではなかった。

「いや友達でしょ、また一緒に遊ぼうよ」

友達、と言う言葉の響きが、こんなに嬉しく感じる日が来るとは思っていなかった。

「…ありがとう」

「こちらこそ！」

奈津と埋木がこれからどうなってくのだろう。二人がずっと仲良くしてくれることを祈る。

こうした幸せな出来事から二週間後、休み明けテストが終わり席替えも済ませたあと、埋木の住む町で火事が起きた。なんとそこは奈津の家、つまりフレンドーナッツだった。

埋木は気が気じゃなかった。奈津のスマホに連絡を入れてみたが全く既読がつかない。電話にもでない。ここ数日は非常に寝つきが悪かった。ことの顛末はある朝、食卓にて母から聞いた。

「あなたが通ってたドーナツ屋さん、もう辞めちゃうんだって」

「…へ」

「火事あったでしょ。放火だったかな。売り場の部分がもうどうにもならないみたい。引っ越すそうよ」

「そう」

「何、クラスメイトが大変な目に遭ったのに興味なさそうだね」

「だって、話したことなかったし」

これは嘘だが、母はドーナツ屋にいったことすらなかったのでこれがバレることはない。学校へ行くと、奈津が転校したこと、放火犯はまだ捕まっていないこと、自分達も十分注意することが担任から告げられた。

奈津からの、着信が会ったことに気がついた。

「! なんで」

『埋木くんには言っておこうと思って。私、自主的に退学しました』

翌日、埋木はいつも通り学校に向かった。自分の席だと思ふ場所に座るとどうも違和感が

ある。

「そういえば、席替えしたんだっけ」

クラスメートが揃い始める時間になると、奈津がいないことがひしひしと伝わって辛かった。学校で親しくしたことはなかったのに、奈津のいない日常はいつもとそんなに変わらないが、存在自体がないことは寂しかった。埋木は、奈津との企画が思ったより自身の脳髓に刻み込まれていることをうっすらと感じる。そうして、彼女の幻影に縋るように、自分達で頑張って拵えた Web サイトを眺める。

地図に目を向けて、なんとなく縮小してみると、お店が市の真ん中にあることがわかった彼女はずっと何かに穴を開けるのが好きだった。

中心にあなが空いていないのは彼女の信条に反した。

放火犯はまだ見つかっていない。

そして、彼女の席はこの教室の中心にある。

埋木は、奈津のその執念を何処か他のところに向けて欲しいと、彼女の家の商品の味を思い出しながら、彼女の両親の顔を思い出しながら、お客さんの顔を思い出しながら、心の底からそう思った。

「フrendーナッツ」のシュガードーナッツが二度と食べられないことは彼の心に大きく穴を開けなのであった。